
信頼関係

百合姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信頼関係

【Nコード】

N1935S

【作者名】

百合姫

【あらすじ】

少女菊香は、わけあって人が信じられなくなってしまっていた。そんな菊香が会っていく沢山の個性的な人達。菊香は変わっていきけるのだろうか？

三日月学園

「駄目、やめて、お願い！」

真っ暗な、何も見えない部屋で鳴り響くのは幼い少女の乾いた声。

「いや、やめて、やめて！！殺さないで、いやあああ！」

少女は叫ぶも、その声は届かない。

…その時、少女の大切な人が、帰らぬ人となった。

静かな部屋に響くのは、おぼつかない足取りで外に出て行く足音だけであった

*

*

*

「教室、何処だろう…？」

掲示板の周りには、むせかえるほどの人、人、人。

少女、二ノ宮^{「二ノみや」} 菊香^{「きゅうか」}はこの、三日月学園の新生である。

校門の前に置いてある掲示板を、人の波に押されながら見つめる。

どうやら一年B組が、菊香の教室らしい。

「B組…ですか。」

菊香の顔は、長い前髪でちっとも見えないが、…少し悲しそうに見えるのは気のせいだろうか？

菊香は校門を通り抜け、下駄箱の指定された場所に靴を置き、一階の一年B組に向かって歩きだした。

三日月学園（後書き）

どうでしたか？

これは長編にするつもりです。

暖かい目でみまもっていてください。

仲良くなんて、したくないくせに

ガラッ

一年B組の教室のドアが勢いよくあくと同時に入ってきた少女に、あたしは目を奪われた。

なぜかって？その容姿にだよ。髪は真っ黒の綺麗なロングヘア、肌は透けるように透明な白で、髪の色がよくきわだっている。それにその瞳の色！！
ルビーみたいに真っ赤！すごく綺麗なの。

ああ、後で自己紹介するってわかっていているけど…
話しかけたい！その髪触ってみたい！！抱きしめたい！
そんなことを考えていたあたしは、いろんな意味で百面相していた、
そして言うまでも無く、みんなから痛い目で見られていた…

いけない、いけない
気をしっかり持て！あたし！

そしてひょいっと時計がかけてあるほうを見た。
…もう教室の時計は9時30分。
先生が来るまで我慢我慢。

* * *

私が席について数分して私達の担任と思われる男性が、教室に入ってきた。

皆いつせいにそちらに目を向ける。もちろん私、二ノ宮 菊香も同じように目を向けている。

「みんな、席に着け！…よし。俺は秋島祐だ。あきしま ゆう 今日からお前達の担任を務めることとなった。お前達は今日から三日月学園の中学生。今まで許されてきたことも、今日からは注意される。気を引き締めていこう！」

えーと、それじゃあ一人ずつ自己紹介をしてもらおう。まずは…二ノ宮！」

「…はい。」

静かな教室で一人、席を立って返事をする。今教室は静まりかえり、誰一人口を開こうなどとは思っていないでしょう。そして誰一人、私の紹介を親身になって聞こうとする人も、ハッキリ言いますと、いないでしょう。

それも当たり前かもしれませんが。

私はあまりにも、人様の恐怖心をあおるにはもってこいの容姿をしているのですから。

「二ノ宮 菊香です。…終わります。」

私の容姿と紹介の短さに度肝をぬかれている先生、目をあわせようともしない生徒、

…頭の中では分かっている、やはり少しは寂しいですね。

ふう、と小さく、あまりにも小さいため息をはいて、私は席に着いた。

——シーン……

静まり返った教室を表すなら、多分この表現が一番正しいでしょう

ね。

半ば厭きれて成り行きを見守っていると、そこに場違いなほどハツラツとした声が、沈黙をぶち破った。

「はい！次あたし！あたしは近衛^{このえ} 美紀^{みき}！よろしくお願いしま〜す
！！」

…げ、元氣デスネ。

ちらつと周りを見回してみるけれど、…やっぱり、皆さん同じような顔でかたまってる。

同じような顔といえはもちろん、…あきれた顔ですよ。

あの沈黙の中で、何を考えればそんなハツラツとした声がだせるのでしょうか？

…ちよつと羨ましいです。

そんな唐突な自己紹介に、クラスのみんなは少し気が緩んだようだった。

今は、その元氣な性格にお礼を言いましょう、近衛さん。

無事に自己紹介も終わり、席を決めて、私はもう帰る準備中。

もう教室には誰もいない、私が最後。

教室の電気をパチツときつて、扉はしっかり閉める。

…今日はいろいろあつたな、まあでも、明日は変わりなく、クラスの人には避けられ、

誰も友達なんか出来ぬまま、3年を過ごすのだろつな。けど、その方が私にとってはいいことだよね。

いつ裏切られるか、裏切るか分からないのに、誰かを信用するなんてバカげてる。

…帰ろつ、いつまでここにいるつもりなんだ、私は。

そう思い、教室のドアから玄関に向けて歩き出そうとしたその時、

「あ、待って、待って、二ノ宮さん！一緒に帰ろあ！」

その声にびっくりしながら、冷静を装って振り返ってみる。

と、やはり近衛さんだった。クラスの人の中で、私に話しかけれそうなのは、

この人しかいない。

「…なんですか、近衛さん。私になにか？」

その私の問いかけに、近衛さんはひどく感激でもしたかのように、

「あ、名前！覚えていてくれたか！嬉しいな！二ノ宮さんに覚えてもらえて！」

覚えて、ね…

あんなに驚きの自己紹介をみたの初めてだしなあ、覚えるよ、普通。

「ね、一緒に帰ろう？あたし、もっと二ノ宮さんのこと知りたい！」

…このときの私はまだ、近衛さんが私の人生を狂わせたなんて、
気づきもしなかった。

仲良くなんて、したくないくせに（後書き）

な、なんかしょっぱなから長くなってしまったような？
後書きまで読んでくださり、ありがとうございました。

この学校って不思議な人が沢山いるのね

私は今、B組みとC組みとで合同授業を受けていた。
そして疑問に思ったことが一つ。

「…この学校は男子と女子一緒なのかしら？」
ここは今校庭、体育の合同授業でサッカーの講習を受けていた。
私はてっきり男女別と思っていたので、少し驚いていた。

校庭の真ん中あたりにみんなは体育座りをして、生徒の前に仁王立ちしながら

説明している先生に、みんな注目している。

…男子以外は、ね。

女子は先生の話に耳をすまして聞いているが、男子はもうかってにサッカーを

始めている。先生も、最初は注意していたが、もう諦めてしまった
みたいだった。

でも一人だけ、話を聞いている男子がいる。

あぐらをしているが、はしたない感じはまったくしない。…すごく
不思議な人だけど、

結局この人も、あの人たちと同じなんだわ。そうに決まってる。そ
う思ったが、

一番後ろに座っているその男の子をチラッと盗み見た。少しきにな
っただけ、

そう、他の男子は無視してサッカーをしている中で、一人だけ先生
の話を聞いている

彼が、ほんの少し、どういう顔をして聞いているのかが気になった
だけ。

見てみると、彼はすこし眠たそう…

こつくり、こつくりと頭が動いている。こついうのを、世間では可愛いつていうのかも、

そして多分、私には一生関係のない人。

少し眺めすぎたのかもしれない、彼が視線に気がついてしまった！

パチツと目線が絡み合い、私は冷や汗を流した。じゅっ自分を見ているなんて、

私だったら絶対気味が悪い。

思ったとおり、彼は目を見開いて、相当驚いている。…そして次の瞬間、汚い物でも見たような

目で私を見るんだ。…そう思っていたのに。

彼はいかにもキラキラとした効果音がつきそうなほどの綺麗な目で私を見ていた。

え、なんで？なんでそんなキラキラした目で私を見ているの？

私は混乱して、勢いよく前を向いた。あのまま見ていたら、どうにかなってしまいそう

だったから。

それから先生の話はすぐに終わり、みんなでサッカーをしていた。

私は校庭の真ん中、さっきまで座っていたところに無理やり近衛さんに引ッ張られて

リフティングしていた。なぜかその間も熱い視線を感じていたが、それはしつかり

無視していた。けれど、熱い視線だけでは終わらなかったようで、彼はこちらに近ずいてきて、

「ねえ、君さっき僕のこと見ていた子だよね？僕は幸村精一ゆきむらひさこいちって言うんだ。君の名前、教えて欲しいんだけど…」

まだ、こちらのことなんか気にしないで、ただしゃべっていてくれれば、私も楽に無視できたけれど、わざわざかがんでこちらに視線をあわせて、しかもしっかりと目を見て見つめられたら、無視しようとしても絶対できない。

この幸村ってひと、私がこうやられたら無視できないって分かってやっているの？

しかも、この幸村君は結構整っ顔だちをしていて、そんな真っ直ぐに見つめられると、たとえ男の人に興味の無い私でも、恥ずかしくて頬を染めてしまう。

早く幸村君から離れたくて、私は少し早めに自己紹介をした。：名前だけ、だけど。

「二ノ宮 菊香です。：よろしく。」

これでいいこれで彼、幸村君はあまりにも愛想の無い私に厭きれてどこかに去ってしまうだろう。

「へえ、二ノ宮さんだね、僕君に会えて嬉しいよ。これからよろしくね。」

そう言って微笑みながら手をさしだしてきた。：予想は外れてしまったようだった。

この人は、私の予想の斜め上をいくのかもしれない、そう諦めて私は幸村君の手をとった。

後ろで近衛さんが、

「あたしだってまだ二ノ宮さんの手、さわったことないのにー！」と意味不明なことを言っているような気もするが、そこはスルーしておくとする。

…近衛さんといい、幸村君といいここは不思議なひとが結構いる学校だな。

そう思い、ふう、ときずかれないうちに息をはいた。

この学校って不思議な人が沢山いるのね（後書き）

まだまだ続きます。

今度出てきたのは幸村君です。

言っておきます。

この小説は二次小説ではありません！

ご了承ください。

平和な帰り道

なぜこんなことになってしまったんだろう…

私は今日は一人でさっさか帰るつもりだったのに。

今私は挟まれて帰っていた。何に挟まれているかというところ…

「ちよつと幸村君？二ノ宮さん嫌がってるじゃない。もっと離れたさいよ！」

そう言いながらもあなたも十分近いよ、近衛さん。

近衛さんは私をぎゅーと横から抱きしめ、幸村君に向かって鋭い視線を向けている。

あんまり強く抱く締めるものだから、私は少し息苦しくなってきた。いた。

「そんなあ！全然近くないよ！むしろ近衛さんのほうがずっと近いよ。」

二ノ宮さん苦しがつているじゃないか！放してあげなよ。」

そう言つて、反対からも幸村君がくっ付いてくる。苦しい…

なぜこんなことになっているかつて？

…回想しよう。

…

…

「にーのみーやさん！一緒に帰ろうよ、どうせ一人で帰るくらいなら、

一緒に帰ったほうが楽しいって。ねー、いいでしょ？」

そう言つて無駄にくっ付いてくる近衛さん。最初からすごい人かと思つていたが、こつもすごいと言葉が見つからない。

私から離れるようにそれとなく嫌味を言つてみたりしたのだが、どうも近衛さんには効かないらしい。笑顔で受け流されてしまった…

「あ、二ノ宮さん！…と近衛さん、偶然だね、こんなところで会うなんて！」

これはもう運命なんじゃない？もうこのまま一緒に帰ろう？」

「そんなわけ無いじゃない！！それにあたしもいるのよ？
ぜーんぜん！運命的でもなんでもないっての！」

それに二ノ宮さんは私と一緒に帰るの、あんななんかの入る隙間はこれっぽちもないんだから！！」

校門に着いたところで、偶然鉢合わせした幸村君は、
爽やかな笑顔でこちらに近ずき私の手を握ってくる。最近思ったことだが、

幸村君は天然なんじゃないかということだ。普通にこんな爽やかな
笑顔で私に近づく

人なんか見たこと無かつたし、こんな恥ずかしいセリフや動作、天
然じゃなかったら

誰がやるというのだ！ちなみにさっきの笑顔で数人
ノックアウトしているのにもきずいていない…

そして近衛さんかというと、すごい形相で幸村君を睨み付けながら
幸村君の言葉を全否定している…

否定してくれることはありがたいけれど、…こつちも少し怖い。
そして私はいつあなたと帰る約束をしたのだろうか…？

「えっ、そうだったの？でも変える約束をしていたんなら、もう一人も二人も一緒だよな？そこに僕もいれてくれないかな、二ノ宮さん。」

幸村君は有無を言わさない綺麗な笑顔で微笑んでいるし、

近衛さんも納得はしていないみたいだが、一緒に帰りたいのは同じらしく、

ひたすらに私を見つめている。

…もう何を言っても無駄なんだろうな、だったら確かに幸村君に言うとおり

かもしれない。そう思って、私はひとりで帰ることを諦めた。

そして今に至る

続 平和な帰り道（前書き）

平和な帰り道の続きです。
どうぞお楽しみください。

続 平和な帰り道

「そういえば二ノ宮さんって、兄弟いるの？」

「えっ……」

いきなりの質問に、私はびっくりして近衛さんを見た。

さっきまで違う話題だったのに……

今は公園の近くを通っていた、子供達がきゃっきゃっと
楽しそうに遊んでいる。

硬直して答えられないでいると、幸村君も気になったらしく
私にキラキラした期待したような目を向けてくる。

しかしきつと、私に兄弟がいるのを期待しているわけでは
ないのだろう、なぜかそう思った。

「……いませんが、近衛さん達は、ご兄弟がいらっしゃるのですか？」

私は二人の目を見て、少し気になったことを問い返した。
そうすると二人は『珍しく』顔を見合わせて、

「いるよー弟が一人、我俣で困っているんだよねえ」

「僕も妹が一人いるよ、結構可愛いと思うけど、二ノ宮さんには
かなわないかな？」

「……そう」

いるんだ、いないのかと思った。

二人は不思議そうにこっちを眺めてくる。

ふと周りを見ると、もう私達は駅前にきていた。

周りは、電車のガタンゴトンという音、主婦達のにぎやかな話し声。

少し前までは、私のお母さんもこの中に入っていたのに…

「それじゃあ、僕はここで、それじゃあね、二ノ宮さんに近衛さん」
そういつて、幸村君は駅のホームに入っていく、幸村君を見た女の子達は、

キヤーキヤーと黄色い声をあげている。…ほんとにきずいてないな

「ふう、やっといったかでも残念、あたしもそろそろかえらなきゃ。
バイバイ二ノ宮さん。」

たたと駅に沿って近衛さんも走ってゆく、その元気な後姿に、
私は自然に笑みをこぼした。

そして私も、自分の家に帰るべくきびすを返す。

これからの生活は、私が思っていたものとはまったく違った。
まだ、完全に信用してはいないけれど、彼らの性格はうそ偽りがな
い気がする。

…私ができずに笑みを刻むくらいには。

番外編 真つ赤な瞳は母親の形見…（前書き）

これは、信頼関係の番外編ともいえる物語です。
呼んだ方が、多分絶対いいです。

残酷な描写が多数、いえ結構多めに含まれて折りますので、
苦手な方はご遠慮ください。

申し訳ありません…

ですが、この番外編を読まなくてもお話は分かりますので
ご安心を。

番外編 真つ赤な瞳は母親の形見…

お話をしようか。

それはまだ、菊香の目が青かった頃の話だよ。
聞いていくかい？

ブチッ

嫌な音が部屋に響き渡る。

菊香は、母親と一緒に楽しそうに笑い合っていただけだったのに…
今はポタツ、ポタツという水音だけ。

部屋は真っ暗で、なにも見えない。

滴る血だけは赤々とはつきり見えた。その光景はあまりにも酷い
少女、菊香の瞳は極限まで開かれ恐怖に怯えていた。

目の前の光景は、まだ少女だった菊香には刺激的過ぎていた。

「…お母さん？なんで涙が赤いの？痛いの？」
菊香はうすうす分かっていた

お母さんが知らない人に刺された――

母親の心臓には、包丁なみの大きさのナイフが深く突き刺さっている。

そしていたる所に赤い染みが服に広がっている。
そしてそれは今も、徐々に広がっていつている。

母親は、いきなり入ってきた男に刺されそうになった菊香を
かばって、自身がナイフに刺されてしまった。そのため、
胸に自分の大切な娘を抱くように抱えている体制のまま、

苦しそう唸りながら、菊香を守るようにその体制を崩さない。

男は人間とは思えないほどの形相だった。

目はギラギラと怪しく光っていて、ナイフを握っていた手はこれ異常なくらい

血で汚れていた。

と、その男がなにを思ったのか、母親に刺さっていたナイフを引き抜く。その表紙に、母親の顔は苦痛に歪められた。

男はナイフを暫し見つめ、それを思い切り母親へと振り下ろす！

ギラリと男の手の中にあるナイフが不気味に光った。

ザクッ、グサッ、ブチッ

ナイフが母に刺さる音。男がナイフを深く差し込む音。母の血管が切れる音…

何度も何度も振り下ろす。

「いや…やめて、お願い。やめて…いやああああ！！」

母親はもう当に死んでいた。

菊香にくてつと寄りかかったまま、少しも動こうとしない…

男は満足したのか、去っていった。

菊香は眼中に無かったならしかった。

母親の瞳は見開かれたまま、血の涙を流し続けていた。

母親の顔を、目を見開いたまま見つめ続ける。

菊香はもう何も考えていないようだった。瞳からは生気が抜けている。

その時、母親の目から血の涙が菊香の瞳にピチャンツと音を立てて落ちる。

普通ここで目にしみて痛くて目を閉じるはずだが、

菊香は瞬きも身じろぎもなかった。

母の無残な死は、幼い菊香に相当のダメージを与えた。
そのまま母親の血は菊香の瞳に絶え間なく滴っていく。
その母親の血の涙は何かを菊香の体に残すために染みていつている
のでは
ないかと疑うほどにゆっくり、けれど着実に菊香の瞳に染み渡って
いく。

そして気づいたときにはもう、菊香の瞳はそのまま、
血のように赤く染まっていた…

信じるも信じないもあなた次第なんですよ…？
でも、真実菊香の瞳は尋常じゃなくらい赤い。
それに普通、髪があんなに漆黒の綺麗な黒なのに、
瞳が真っ赤ということはありえないんです。
兔と同じですおんなよ。

瞳が真っ赤になるには、肌や髪も、
普通以上に白くなければいけない。
それが原理なのです。

さあ、あなたはこのありえない話を信じてくれますでしょうか…？
そして、菊香の物語を読み進めてくれますか…？？

それぞれの思い、渦巻くテスト

「いいか！このテストは小学校のときとはまるで桁違いの難しさだからな！

しつかりと先生方のいうことをちゃんと聞いて、テストに支障がないようにな！

でないと俺のクビがかかっているからな！」

いつも以上に熱血ぎみの秋島先生を菊香は呆れ半分、哀れみ半分の眼差しで見っていた。

二ノ宮菊香の場合

…いつも思うけれど秋島先生って、見てるこっちが疲れるほど熱血よね

テスト、か…そんなに心配するほどでもないかな

私、二ノ宮菊香は窓の外に意識を向けた。

もともと私の席は、窓側の一番後ろ、しかも前に集まっている生徒はみんな背が高い。そのためよそ見をしていてもあまりばれることは無かった。

…ん？

テスト…そういうえば、近衛さんは大丈夫なのだろうか？

幸村君はたいしたこと無さそ…はっ

…私には関係ないことだったわね。少しあの二人に毒されていたみたい

もう、決めたのよ…人と関わって、いいことなんか一つも無かった瞳が不気味だと罵られた

一人でいても水をかけられた
無視しているつもりでも、体が強張って意識していること丸分かり
いつも恐怖の目で見られた

…いいことなんか無い、絶対

近衛美紀の場合

「テスト、かあ…はあ、憂鬱だなあ、ヤダなあ、…やりたくないあゝ
い！！」

美紀は自分の机に頬をくっ付け、手足はぶらりと垂れ下がり、なん
ともみっともない格好で文句をたれていた。それを聞いていた美紀
の友人達は、半ば飽きれながらも慰める。

「美紀！元気だしなよ！始まつちやったもんはしょうがないって！」
元気に美紀を励ますのは千景ちかげ 雪ゆきという少女である。
小さくガッツポーズをして喜ぶのが癖であるが、本人は気づいてい
ない。

「そゝうそゝ、なればなるってゝ」

近衛の前の椅子に手を置いて座っているのは風間かざま 秋葉あきは。
間延びした口調が特徴的な笑顔の耐えない少女である。

「美紀はそれが出来ないからため息付いているんじゃない？」

本人は慰めているようだが、あまり慰めになっっていないのは、
灰薔薇はいばい 亜真莉あまりと言う少女である。

少しぼんやりしているのが玉に傷だが、基本できにしっかりとしている。

「…あ、そういえば…」

ふと亜真莉が今きがついたというように口に出す

「どうしたの？ 亜真莉」

亜真莉が何か言いたそうに口ごもるので、美紀は机からのそりと起き上がり、しっかりと座って亜真莉を見つめた。

「その…、二ノ宮さんとは、その…な、仲良くできているのかなあ
って思っ」

いつもはきはきしている亜真莉が口を濁すのはとても珍しいことだ。
それほど口にしにくいことなのだろう？

「？ 仲良く出来てるって…、当たり前じゃないの… 亜真莉がそんな
こと聞くなんて、思わなかったけど？」

それを聞いた亜真莉は、眉を寄せ、口を引き結びなんともいえない
微妙な顔で次に何を言うか迷っているようだった。

「だって…、普通有り得ないわよ！ 真っ黒な髪に真っ赤な瞳だなん
て… 少しでもじゃない、怖すぎるわ！ まるで悪魔でも尽いている
ような…」

亜真莉は腕を組み、恐ろしそうに震えていた。それを見て美紀は驚
きを隠せないでいた。美紀は、大好きになった友達が、こんな風に
思われているだなんて知りもしなかったのだから…

幸村精市の場合

「幸村ああ！！たゝのゝむうゝ勉強教えてくれえ！！もう後がな
いんだよ！お願いだ、頼む！このとおり！」

いきなり突進する勢いで精市に押込んで来たのは精市の友達やまざきの山崎

優也ゆうやという精市のよき相談相手でもあるのだが…これを見るとよき
相談相手だとは到底思えない。どちらかといえば精市のほうが相談
相手である。

「珍しいな、優也が僕に相談なんて…しかも勉強だなんて、何か企
んでるの？」

余裕の笑みまで称えて悠然と廊下を歩いていた精市は、いきなり相
談を持ち込まれて困るというよりむしろ迷惑そうだ

「まったく…まあなにを企んでもいいけど、優也は勉強できるだ
ろ？あゝあ、勉強教えてあげるなら、二ノ宮さんの方がよかったな
あゝ」

はあ、と大きなため息をついてわざと大げさに嘆いてみせる精市に、
優也は最初は呆れて聞いていたが、二ノ宮の内容が聞こえると、少
し瞳の色が強くなった。

「精市、二ノ宮は止めておけ。あいつのいい噂なんて聞いたことが
ないぞ」

「…じゃあ、どういう噂が流れているか、知っているかい？」

それに、冷静に精市は取り合った。菊香の態度で、なんとなく精市
は察していたのである。

「…特に女子からが多い、最初からあいつは人と触れ合うのを拒絶
していたんじゃないか？…ふう、だからかもしれない、悪魔に尽か
れているだの、呪われているだの、あいつに近ずくと死んでしまっ
たの…たくっ女子が考え付きそうなことだよ」

それに精市は俯いて、悲しそうに目を伏せた…

美紀と精市が始めて菊香の状況を詳しく感じた、テスト
直前の出来事であった…

もしかしたら…（前書き）

これは幸村が二ノ宮をどうしてそんなに好きなのか（友情的な意味で）

と聞かれて書いたものです。

番外編みたいですが、違います。

全部幸村です。

なにかこれは可笑しいんじゃないか？

と言うものがあつたら、お教えください。

お願いします！

もしかしたら…

僕は、彼女と面差しがとても似ている少女と会ったことがある。それは、まだ僕が小学1年にも満たない年のころだった……

「幸村くじゃあな！また遊ぼうぜ！」

友達だった彼と別れ、僕は帰り道を急いで走っていた。遅くなると母が心配するからだ。僕の母は、僕がほんの少しの間顔を見せないだけで泣き崩れたりする。それを落ち着かせるのは、いつも父と僕だった。あの日は、あんまり友達と遊ぶのが楽しくて、いつも帰る時間より遅くなっていた。

そして道の角を曲がった時、僕は、僕と同年くらいの女の子とぶつかりそうになった。

それが、最初で最後、あの子と会って、言葉を交わした日。

女の子はすんでのところで止まっていたから、僕とぶつからずにすんだみたいだった。

僕は彼女に少し近づいて、「大丈夫？」と言った。

「…うん、平気、どこも当たらなかったもん。あなたはどこも痛くない？」

漆黒の綺麗な黒い髪、澄んだ清らかな青い瞳、子ども特有の丸まった頬、僕はその時始めてみる可愛い顔に、心打たれた。今思うと、それが僕の初恋だったような気もする。

彼女はボーッとしている僕を心配そうに見つめ、「大丈夫？」と、僕と同じことを言った。

もちろん僕は、彼女に見とれていただけなので、「だ、大丈夫！」と彼女に心配をかけないように元気に言った。それに彼女はまるで天使が微笑むかのように笑うので、また僕は心底驚いた。

そして短い会話をいくつか話して僕達は別れた。

その後帰ったあとに母に泣き崩れられたことは言うまでもない。

それから僕は彼女とは一度も会うことがなかった。

そして月日はたち、中学生になって三日月学園に入学して、教室に入ろうと手を取っ手へかけたその時、

同じく教室に入ろうとしていたのだろうB組の子が目に入った。

そして僕は目を見張った、あの子かもしれないと――

全体を見たわけじゃない、もしかしたらまったくの別人かもしれない、そう思いながらも完全に否定することは出来なかった。なぜかそれは僕があの日会った彼女以外に、あんなに綺麗な漆黒の髪をしている子なんて、見たことがなかったからだ。

それから何日かが過ぎて、合同の体育授業、先生の話聞いていたらなんだか眠くなってうとうととしていたら、なんだか前からすごく視線を感じる。

最初はすぐにやむだろうと思って待ってたんだが、なかなかやむ気がしないので視線を感じる方向を見てみると、あの綺麗な黒い髪の子がじつと僕のことを見ていた。

それは他のこが送る黄色い視線じゃなくて、ただただ見ている、そんな感じの視線だ。

でも彼女の顔を見て、僕はとても驚いた、うつかりそんな顔をしてしまったかもしれない。

だってとても驚いたんだ。そっくりだった。雰囲気とか、顔の輪郭とか、まああの頃は顔も子どもらしく

丸まっていたけど、でもなんだか分かった。でも唯一違うところが一つだけあった。

それは瞳の色だ。前は澄んだとても綺麗な青い瞳だったのに、彼女の瞳の色はまるで、『血』のように酷く濁った色をしていた。

やはり違うのだろうか…？

そう思ったとき、彼女は勢いよく前を向いた。まさか目が合うなどつゆほどにも思ってたなどいなかったのだろう。そして僕は気がついた彼女の背中が、あまりにも寂しそうに丸まっていた。

あの濁った目、もしかしたら僕の知っている女の子じゃないかもしれないけど、

僕は彼女に好感を覚えた。その寂しげな背中が、なぜかとても可愛らしかったから。

時は過ぎ、テスト期間がやってきて優也^{ゆうや}は僕に、二ノ宮さんは止めておけといった。

なぜか聞いたら、二ノ宮さんはいい噂を聞かないという、じゃあどいういう噂があるのか聞いてみたところ、有り得ない噂ばかりだった。二ノ宮さんと知り合って、強引に一緒にいさせて貰って、大分彼女のことが分かってきていた。

だが、分かってきたと言っても、ほんと些細なことばかり、それをつなぎ合わせるのには苦労した。

彼女は極端に人と触れ合わないようにしているのは、誰にでも目に見えるように分かるが、それはなぜだかよく分からない。

だがこれだけは分かる。二ノ宮さんは優しいこだ、呪いだなんてとんでもない。

ただ、その容姿から連想してしまうものが、呪いや何やらというものなんだろう。

そして、もしも彼女があの子なら、絶対そんなことしない！

悲しく思いながらも、内では激しい怒りに見舞われていた。僕はそんな思いを優也ゆうやに悟れないため、深く俯き、怒りを拳に込めるかのように強く握りしめた。

どうしたら二人と離れられるの…？

「それじゃあ、テストを返却するぞー。まあ一応言っておくが、皆の平均はそこそこだった。だがしかし！赤点がひとりもいなかった！そこは先生すごく嬉しいぞ。」

今日も熱血気味な秋島先生が興奮を一生懸命押さえたような口調でいったが後半は押さえ切れなかったようだ。教卓をバンツと勢い良く叩いて拳をギュツと握り締め、そんなにたいしたことでもないのに熱弁した。

そして、その話を聞いた生徒…否。一人の生徒が歓声を上げて喜びだした。それはもういきなりの出来事だ。いきなり席を立ちいまにも、おっしやーと叫ばんばかりのこの喜びの表し方。

勿論、このクラスで一番のバカ、いや明るい少女、近衛美記このえみきである。

「やった…！やったよ？！赤点無し、無しだあ。よっしゃあ！」

無論、菊香は他人を決め込もうとしたらしく、窓の外、遠くの空を肩肘ついて見据えていたが、時すでに遅し、空しくも

「二ノ宮さん！あたしやったよ？！赤点無しだよ？ナッシングだよ？もうちょー嬉しいって聞いてよあー」

いとも簡単にその努力は砕け散った。後半は半泣きになっている美紀だが一方、菊香は勿論…無視。千景達も呆れて声が出ないようだった。一部の生徒はこの漫才みたいなやり取りにツボをつかれたらしく、必死で笑いを抑えている生徒がちらほらいた。だが、空気をまったく読んでない！

「お前らあゝ嬉しいのは分るが先生、速くテストを返したいなあ…」
秋島先生のなんと頼りない一言で、クラスはしばらく笑いの渦におちいった。

あれからいくらかたちテストも返され、菊香はテストの結果を見て、ため息をついた。

『よくも無く、悪くも無くってところか……いや、でも平均よりは高かったし……でも、その平均が結構低いんだよねえ。仕方が無い、職員室にいつてやり方やら何やらを聞きに行くしかないよね。あまり行きたくなかったけど。』

そんなことを考えていると、二人の生徒が菊香の教室のドアを通り過ぎようとしている途中に、その生徒の会話が偶然聞こえてきた。

「ねえねえ、テストの結果どうだった？」

「わたし全然駄目。あんたは？」

「あたしもそんな感じ。だって赤点だったし……」

「え？それマジ！？やばいんじゃない？」

そんなことを言いながら廊下を通り過ぎていく生徒を、菊香は自分の席から眺めていた。その視線は、少し羨ましそうな、それでいて冷たい無表情にもとれるあいまいな顔は、菊香が職員室に向かうために、ガタリと席をたったときには、すっかりいつもの菊香の表情だった。

「失礼します」

そう言っただけで扉のドアノブに手をかけて押す。手を離すと、ノブはかっつてにガチャリ、という音をたてて閉まった。職員室は菊香が入ってきたとたんに微妙な沈黙をつくった。これが嫌で、菊香はココに来るのを躊躇ったのだらう。教員達は、決して菊香を軽蔑しているわけじゃない。ただ、恐ろしくもあり、その反面尊敬してもいる。

なぜかと言うと、実際菊香は成績がそんなに悪いわけでもない。ただし良くもないと菊香自身は思っていることだろう。だからだろうか、菊香が入ってくると、どうしたらいいか分からず、ああいう微妙な雰囲気になってしまうのだ。

「その、分からないところがありましたので、教えていただきたくて、来ました。英語担当の水谷先生はいらっしゃいますか？」

「失礼しました」

来たときと同じように扉を閉める。知らずにフツとため息が漏れた。どうやら相当緊張していたようだった。さて、用件も終わったし教室に戻るつか、そう思い階段を降りようとしたところに、とても扱いにくく、又、とても疲れる面倒くさい二人組みに見つけられてしまい、とてもげんなりした気分になった。

なんと不幸な運命だろうか、私はこの運命を呪いたい、いや、呪う。

「二ノ宮さあ〜ん！探したんだよ〜」

…まるで子犬のようにこちらに駆けて来る近衛さんはすごく痛いた…こほんっ、…可愛いと表現できるでしょう。それに比べて…

「やあ、二ノ宮さん。職員室によっていたんだね、真面目な子って、すごく好きだな僕」

すごく優しいに、いやむしろ楽しげに満開の笑顔で言っただけのこと、それまた物凄く恥ずかしい台詞。

もう見慣れて驚かないけれど、数人やつぱりうしろに倒れてますよ、幸せそうな顔で。当人が全く気がつかないのも見慣れた風景。…でも、あまり見慣れたくなかった。この人たちといることに、話すことに、違和感を感じなくなる日が来ることを思うと…とてつもなく怖い。

「ちょっと幸村！あんたまたこつそり二ノ宮さんを口説こうとしてるでしょ？！お見通しなんですからね！あたしより先に二ノ宮さんと仲良くなるうなんて百年はやいわ！」

「やだなあ、近衛さん、違うよ口説こうなんて思っただけだよ？僕は純粹に思ったことを口に出してるだけ…」

「それが口説いてるって何で分らないの！？」

私の目の前で口論は続いている。私に関わらないで、そう言えば簡単にことが運ぶのに、何故私はそれが言えないの？たった一言じゃない。そう思い、口を開いても、なぜか言えなかった。ここの居る事が耐えられなくて、二人の横を通り抜けようとした…のに。

「ああ！！待って、二ノ宮さん！聞きたいことがあって探してたんだ」

「…何をですか」

簡単に二人は私を立ち止まらせる。立ち止まってしまったものはしょうがないと、あえて冷たく言っただけ…はずなのに。

「えへへ…テストのでき、かな？」

あっさりかわされて、いや効き目なし？呆れながらも、テストの答案用紙を二人に渡す。

「…どうぞ」

渡された答案用紙を見て二人は…なぜか心底驚いたような顔をした。特に近衛さんが。

幸村くんは、感心していたというか、予想していたという顔。

幸村君はなんとなく分かるけど、近衛さんはどうして驚いているのだろうか…？

「どうしました、近衛さん」

「だってほとんど百点満点だし」

…？それがどうかしたのだろうか

「それが？」

「い、いや、だからすごいことでしょ？」

またそんな驚いた顔されてもどうしていいか分からないんだけど…
しかも、こんどは拳を握り締め、胸のところまで上げている。

「それが普通でしょう？」

「ええー！だったらあたしの努力は！？赤点ギリギリで喜んでたあたしの立場は！？嘘」

ガクツつと勢い良く床に手をつきしくしく泣いている近衛さんに、
励ましもつかない慰めを言っている、そんな二人を見ながら、私は考えていた。

どうしたら二人と離れられるの…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1935s/>

信頼関係

2011年10月8日20時38分発行